

8)

著者：杉元俊彦，小森弘詞，松永勝也

論文題目：高齢者の右折時ギャップの大きさの実験的測定

論文集名：日本交通心理学会第50回大会発表論文集

発表年月：1994（平成6）年11月

頁：37, 38

# 高齢者の右折時ギャップの大きさの実験的測定

○杉元俊彦<sup>1</sup>・小森弘詞<sup>1</sup>・松永勝也<sup>2</sup>

<sup>1</sup>豊前自動車学校・<sup>2</sup>九州大学大学文学部

## 1. はじめに

高齢者の自動車の運転における事故（衝突）は右折時に多く発生していると報告されている。この右折時の衝突は、当該対象との間に十分な大きさのギャップ（空間，時間）が保持されていないことによって発生すると言える。このようなことから，高齢者の右折時に選択するギャップは小さいことが予想される。

本研究では，高齢者の右折時のギャップの大きさを実験的に測定し，高齢者の右折時のギャップ選択の問題点について検討することを目的とした。

## 2. 方 法

被験者は，B警察署・B交通安全協会主催の高齢者安全運転教室に参加した60歳から81歳（平均年齢70.4歳，SD=5.2）の男性27名，女性2名であった。

右折を行うと反応したときの対向車とのギャップの大きさは，レーザー・レーダー（名古屋電機製）によって測定した。被験者と測定者との連絡はトランシーバを使用して行った。対向車線車輛は時速40kmで走行した。実験はB自動車学校の教習用コースで行った。

被験者には，「交差点で右折する場合，対向車までの距離がこの程度なら右折ができるとあなたが考えるもっとも近い距離になったとき，“はい”と行って下さい」と教示した。この教示を理解できない被験者には，さらに詳しく説明を行った。被験者には2回の試行を行なわせた。

さらに，KM式反応時間の安定度検査，質問紙型KM式安全運転助言検査，質問紙による意識調査を実施した（質問票を回収したのは23人分）。

## 3. 結果と考察

図1に示すように，選択されたギャップの大きさには個人差があり，25mから65mにわたった。全員の平均値（標準偏差）は，1回目においては49.28(8.14)m，2回目においては48.97(8.88)mとなった。

右折に要する時間は約3秒であり，多くの人が保持している車頭距離は約20mである。このようなことから，5秒以上のギャップで右折しなければ，対向車の運転者をヒヤッとさせるようなこととなる。本実験では，半数以上が50m以下のギャップでも右折可能としており，中には，わ

ずかな反応の遅れでも衝突が考えられるギャップでも右折するとした者も認められた。

質問紙調査の結果は次のとおりである。1)交差点で右折のため停止しているとき、自分のもたもたした運転が自分の後ろで右折を待っている人に迷惑をかけているのではないかと思ひ、気持ちが焦ることがあるかの問に対して、“はい”と解答した人10名(43.5%)，“いいえ”と解答した人は13名(56.5%)であった。2)交差点で右折待ちをしているとき、対向車との距離が十分になるまで待ちきれないで、やや強引に右折することがあるかの問に対して、“はい”と解答した人は5名(21.7%)，“いいえ”と解答した人は18名(78.3%)であった。3)交差点で右折待ちをしているとき、若いときに比べて、右折を急ぐようになったと思うかという問に対しては、“はい”と解答した人は3名(13.0%)，“いいえ”と解答した人は20名(87.0%)であった。4)走行中、他人に追い越されると、カッとなることがあるかの問に対しては、“はい”と解答した人は5名(21.7%)，“いいえ”と解答した人は18名(78.3%)であった。5)十分距離があると思ひ、右折をしたが、意外に対向車の速度が高く、ひやっとしたことがあるかの問に対しては、“はい”と解答した人は15名(65.2%)，“いいえ”と解答した人は8名(34.8%)であった。6)同乗者に右折が早いと言われたことがあるかの問に対しては、“はい”と解答した人は5名(21.7%)，“いいえ”と解答した人は18名(78.3%)であった。

ギャップの大きさ与此らの質問への解答との間に一定の関連性は認められなかった。また、KM検査における反応時間の不安定度、質問紙型KM検査における先急ぎ度得点、不安定度得点との間にも相関は認められなかった。

ギャップの大きさの選択には本人の意識するものとは違う何か内的なもの、あるいは視覚特性などが反映していることが考えられる。

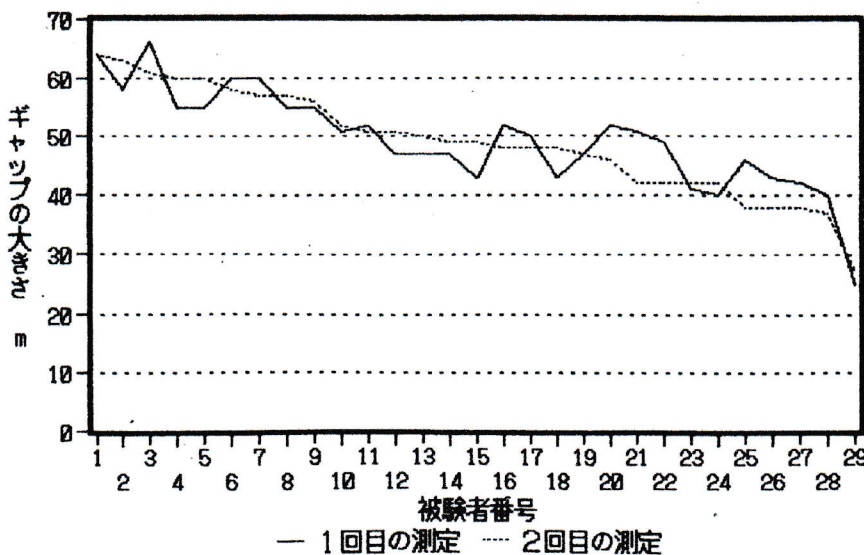


図1. 右折可能と反応した最小ギャップ (個人ごとの2回の測定値)